

## 令和2年度第1回文化政策審議会の発言要旨

## 1 開催日

令和2年11月12日(木) 13:30~15:30

## 2 開催概要

## (1) 出席委員

横山会長、太下副会長、木下委員(オンライン)、澤田委員、鈴木委員、遠山委員、松井委員、宮城委員(オンライン)、森谷委員、諸田委員(10名/高山委員、柴田委員から事前意見有り)

## (2) 議題

- ・令和元年度からの進展及び変更等の報告
- ・第5期ふじのくに文化振興基本計画の策定に向けた論点に関する審議

## 3 発言要旨

項目	発言内容
計画の方向性	<p>○文化芸術は、分断が進んでいる世界の中で大きな役割(縫合)を果たす。誰もが差がないかたちで幸せ感を享受できるようにしていかなければならない。(宮城委員)</p> <p>○コロナ禍で、他者との関わりが希薄になった。今、人との繋がりはとても大切であり、文化で他者とのコミュニケーションを図ることができるのではないか。(松井委員)</p> <p>○文化を中心としたまちづくりについて、計画に盛り込んで総括的に見てほしい。まちづくりで大切なのは歴史、それに基づく文化、環境である。都市景観が均一化し、自分の町を「かけがえのない」と思う価値観が崩壊しつつある。子ども達が帰ってくる町になるよう、歴史や文化、景観の継承について助言してくれる存在が欲しい。(森谷委員)</p> <p>○第5期計画においては、文化資源や地域資源をどのように活用して文化発展を成し遂げていくか、地域経済を活性化していくかが重要。(柴田委員)</p>
世界で輝く静岡ブランドの創造	<p>○SPACの活動は、コロナ禍という危機的な状況でアーティストの創造力が発揮された好事例だった。大きな影響を受けたが、ポジティブな効果も生まれた。(太下委員)</p> <p>○「演劇の都」構想は進めるべきだが、SPACが知名度・求心力を高め、音楽界におけるウィーンフィルになるためには、やり方、戦術をかなり考えないといけない。(太下委員)</p> <p>○「演劇の都」は拠点として重点化すべき。演劇は芸術を生み出す原点であり、身体から広がっていく様々な芸術文化活動をカバーできるのではないか。(木下委員)</p> <p>○コロナ禍で多くのイベントが中止や延期、縮小となったが、みんなが文化に飢えていたことがわかった。静岡には県外からも人を呼ぶポテンシャルがある。(鈴木委員)</p> <p>○静岡が、単なる通過県ではなく「文化の魅力の目的県」になるよう仕立ててほしい。(遠山委員)</p> <p>○現代の芸術は、異なる価値観や今まで気付かなかった美の存在を認知させてくれる。「演劇の都」は、一つのモデルとしていろいろなかたちで展開していくとよい。(宮城委員)</p> <p>○人を喚起していくことに力を入れなければいけない。静岡には埋もれているものがたくさんある。それらをすくい上げ、顕彰してほしい。(諸田委員)</p> <p>○文化資源を「文化資本」と捉え、価値創造のための投資として位置付けるべき。県内の文化活動は全て静岡ブランドの価値向上に向けた資本である。文化資本の増強を図るには価値創造のストーリーが必要であり、その中核として、富士山とSPACを核とした「演劇の都」構想が適当である。(高山委員)</p>
社会の多様な担い手による創造的な活動の促進	<p>○障害者芸術について、国も力を入れており、国の助成制度等を活用しつつ、本腰を入れて進めていくべきである。(太下委員)</p> <p>○障害者芸術には追い風が吹いている。障害者の暮らしと様々な表現活動を社会に位置付け、どのような社会をデザインしていくか。県として取り組むのであれば「演劇の都」と同じように重点化させるべき。「障害者芸術」という一つの分野を作るだけにならないよう、どのような言葉で呼称するのも議論が必要である。(木下委員)</p>
文化を担う人材育成の強化	<p>○高校生を活用してほしい。県の事業は小学生を対象とした鑑賞や体験が多いが、高校生と一緒にプロジェクトを立ち上げたり、応援団として活用してほしい。(森谷委員)</p> <p>○文化活動に関わる「人間同士の交流」が重要。多様な関与者が対話する場づくりに注力することで、新たな価値が生まれ、人材が育っていく。(高山委員)</p>
これからの文化振興のプラットフォームの構築	<p>○アーツカウンシルは、どのような社会をデザインするか。多様な分野でリードしていかなければならない。(横山会長)</p> <p>○アーツカウンシルには、文化芸術活動に対する公的な支援と表現の自由の問題に対応できる人材を配置し、取り組むべきである。(木下委員)</p> <p>○アーツカウンシルは、県民が主役になり、県内の人材が活かされて育っていくことが重要。地域のことをわかっている人、企業や様々なバックグラウンドを持った人が組織の中に入り、市民参加型の開かれたものができる県民に喜んでもらえるのではないか。(澤田委員)</p> <p>○文化の灯を消さず活動を続け、それらがアーツカウンシルに引き継がれることが望ましい。ここから、これからであり、アーツカウンシルに期待している。(鈴木委員)</p> <p>○アーツカウンシルは、文化政策の司令塔として、①クリエイティブな芸術文化活動の推進、②県下の伝統文化、文化資源に光を当てる、③県民自らが活動に参加するよう精神活動の向上を図ることに力を入れ、文化の魅力の目的地になるようリードする存在であってほしい。(遠山委員)</p> <p>○アーツカウンシルについては、「透明性の確保」が最重要課題。文化事業の主体である機関が、透明性ある事業運営や評価を行うことができるか。文化財団内でのアーツカウンシルの位置付けを、財団組織の体制を含めて再考すべき。(柴田委員)</p>
持続可能な文化活動の実現	<p>○進化を遂げている情報機器を利用しながら、新しい展開が必要である。(横山会長)</p> <p>○コロナ禍で既存の文化施設は存在意義を問われたが、どのような活動を展開するかにより静岡は通過県ではなく終着県になる。(木下委員)</p> <p>○「ウィズコロナ」ではなく「ニューノーマル時代」と捉え、新しい生活様式の中での文化活動をポジティブに位置付け、新しい価値と進化を見出していくべき。デジタル技術の進化は時間と空間を越えて、アートや文化をより生活に身近なものにしていく。(高山委員)</p>

